

# Über die Bedeutung der Selbstentfremdung

——die psychopathologische Betrachtung——

別 府 芳 雄

## 自己疎外の意味について

——その精神病理学的考察——

は し が き

現代は「疎外」の時代である。「疎外の現代人のムード」であり、猫も杓子も口を開けば「疎外」という。それでいて、誰も本当の意味を知らない。昭和44年3月5日付、読売新聞夕刊は、人間疎外は「都会の空をおおうスモッグのように出たり消えたりする気まぐれな曇った心理状態のようでもある。それが現代人の心にかげりと汚れを押しひろげているのだとすれば＜疎外のスモッグ＞の<sup>・</sup><sub>・</sub>出所と<sup>・</sup><sub>・</sub>正体を突きとめねばならぬ。それはもはや哲学的な“悩み”ではすまされない世界共通の社会的問題となった」と述べている。また名著『近代人の疎外』を書いたパッペンハイムは「どうしたら、われわれは疎外の力を減らすことができるのだろうか。どうしたら自己自身から疎外され、他の人たちからも疎外されている人間が自分の正体をとりもどし、自分と自分の仲間である人間とをへだてている溝を埋めることができるのだろうか」という質問を多くの読者から受けたと語っているが、この不透明な問題の意味に接近することが小論の目的である。さきに筆者は現代産業社会における人間自己疎外について若干の問題を提

起したが、それに答えるまえに「人間自己疎外」の意味について私見をのべ、「疎外」の出所と正体を突きとめてみたいと思う。

## 1. 疎外の意味

クルト・シュナイダーは「精神病患者の症状に対する多くの漠然たる術語 (Fachausdrücke) を解明し、区別し、もっと明瞭なものとする……精神病理学の課題である<sup>1)</sup>」といったが「疎外」の意味も、また解明し、区別し、確実にされねばならない術語に属する。なぜならば、疎外という言葉はもともと精神病理学の言葉なのだから。「疎外」という言葉が用いられていた古い意味は狂ったひとという意味であった。「フランス語における aliéné, スペイン語における alienado は精神病者・すなわち徹底的に、完全に疎外された人間を意味するもっとも古い言葉なのである。

(いまでも英語で「alienist」といえば、精神病患者を治療する医者<sup>2)</sup>をあらわすのに使われている)そして、その本来の意味たるや、「正常の心理からの逸脱」や「正常性の喪失」であり、フロムの表現によれば「完全に疎外された人間 (absolutely alienated person) を意味する。だからフロムは「狂気の人間は、完全に疎外した人間である。つまり彼じしんの経験の中心である自分を完全に失ってしまっている<sup>3)</sup>」のであり、自我の感覚を失ってしまっている」のだと附記している。つまり狂人こそ完全に疎外された人間なのである。アンドレ・ラ・ランドの哲学辞典にみられる「疎外」は心理的混乱とか狂気の意味である。それでは「心理的混乱」や「狂気」とは何か。精神病理学では感情の疎遠性を Entfremdung としている。ヤスパースによると「現実<sup>4)</sup>は存在意識そのもののなかにある (Wirklichkeit ist im Seinsbewusstsein als solchem), われわれが実体的に知覚するときさえ、現実意識がないことがある。すなわち、現実意識は知覚界と自己の現存在が『疎外』する状況では失われる」と述べている。つまり現実意識は知覚世界 (Wahrnehmungswelt) とその固有の現存在の疎外

において失われてしまうのだが、しからば、知覚世界と固有の現存在がいかにして、いかなる場合に疎外されるのであろうか？ ところで「精神病」の概念について一言触れておく必要があるが、精神病とは「疾病的である心的異常の全部、そして、それだけが精神病である<sup>5)</sup>」と承知しておいて戴くことにする。つまり精神病といえるものは、すべての、そしてただ心的異常のみ (alle und nur die seelischen Abnormitäten) が Psychose であるわけで「疎外」は感情異常の体験である。ここで精神障害を「知的ならびに感情面の障害に分解 (zerlegen<sup>6)</sup>)」して考えてみると、感情は自我の状態であるから、この感情の疎遠な自我の能動性 (Aktivität) が低下した状態なのであり、われわれが豊かに築きあげてきた能動性が低下した状態なのである。具体的には、体験における感情的共感のうすれた状態で、喜怒哀楽そのほか、あらゆる感情が自己から疎遠になり、患者は世の中が味気なく索漠と感じられるようになって、以前のはつらつたる感情をもった自分に比べると機械のような人間に変わってしまった、と訴えるものであるが、こういう場合にはむしろ「障害の比較的軽度の患者の訴え」にせよ——「知覚の過程における一障害<sup>7)</sup>」であることは間違いない。ところで、われわれの体験はハッキリ意識しないにせよ、すべて自己に所属するもので、したがってまた自己の働きである。この自己の働き、すなわち、自我の能動意識の稀薄になった状態は「疎外」であり、精神病理学では、別名、離人症 (Depersonalisation) と名付けているが、疎外も離人も内容的には同じことである。ヴェルニッケは体験を外界精神 Allopsyche 自己精神 Autopsyche 身体精神 Somatopsyche に分け、外界精神の離人症 (疎外) は実在感喪失 Derealisation から知覚界疎外 Entfremdung der Wahrnehmungswelt まであるものと規定しているが、臨床的にいえば、「何でもヴェール越しにみるようで (Es ist, wie wenn ich alles durch einen Scheier sehe,) 人の声は遠く離れたところから聞えるみたいだ (mir aus weiter Ferne zu kommen), それで身体が実在するかどうか

か確かめるために時々自分で自分を触ってみる<sup>8)</sup>」という患者の苦しみとして述べている。さらにヤスパーズは「離人現象や知覚界の隔離も疎外<sup>9)</sup>であって、これをもつものは精神衰弱者とよばれる<sup>9)</sup>」と述べて、次のように説明している。「現実意識は知覚界と自己の現存在が「疎外」する状況では失われるからである。これは、現存在の根元的な一体験にちがいをなく、ジャーネーによって実在機能と名づけられたものである。デカルトの『われ思う、ゆえにわれあり』なる命題は疎外体験の状態の人間にも該当するものであって、この人は、わたくしは存在しない、しかしこの非存在としての自分 (dieses Nichtsein) は永久に生きなければならないのだと逆説的に<sup>10)</sup>いう」のだとしている。以上でまず「疎外」が精神病理学の固有な言葉であることが解ると思う。したがって「疎外」に本来の狂気ないし離人という精神病理学上の意味をつけて考える方が理解しやすい。谷嶋は「疎外とは、現代人および現代社会が不可避に負っているところの病的現象の総称である。さらに的確に言えば、現代人および現代社会に内在する幾多の病的症状群<sup>11)</sup>を総括するために用いられる一つの指標」と定義したが、「病的現象」や「病的症状群」というような異常な体験を強調するのは「狂気」とか「離人」のような本来的意義をふまえて述べているわけなのである。ところがフロイト学派では「疎外」を文化のメカニズムに対する個人の適応障害として個人の解体 (personality disorganization) の一特徴とする。だからマルクーゼの『エロスの文明』のような深層心理学的解釈も出るし、これを批判した武藤の「暴力革命とエロスの幻想」の論文のような「現代工業社会を抑圧の機構と断じそのトータルな否定を説くマルクーゼの矛盾を發いた」疎外論も生まれる。また個人の解体は個人の適応障害とすると、適応害の原因たるべき文化のメカニズムが問題となる。かくして「正常の心理状態からの逸脱」や「正常性の喪失」という意味から「正気の社会」をまず前提して、それからの偏差を考える価値概念に変わっていくことになる。丁度、務台らが全体的人間という一つの理想的人間を画い

て、そこからの偏差を「疎外」と規定したように価値概念である。現在英語の alienation 仏語の aliénation は「譲り渡す」というくらいの平易語であって、法的には「譲与」「割譲」の意味である。ところが Entfremdung という場合には、本来の「狂気」の意味に、哲学や思想の言葉として「疎外」という意味がつけ加わったものと考えねばならず、安易に「ゆずり渡す」くらいの日常語でないことはいうまでもない。ドイツ語の Entfremdung というのは、Wahrig の Deutsches Wörterbuch によると、eine Sache ihrem Zweck entfremden（目的にそむかせる）sie für einen anderen Zweck als den vorgesehenen（もくろんでいたことを別の目的のため使用する）と説明されていて英語の意味と違う。von der Wahrheit entfremdet とは「真理に反した」ということであり、第2次世界大戦のさい、ドイツの戦没兵士が恋人や新妻にあてた手紙のなかにも Entfremdung という文字はよくみられるが、けっして「ゆずり渡す」などという意味ではない。英語の意味と違って、それぞらしいという意味である。しかし、この「疎外」がブルツゲルの『哲学辞典』（W. Brugger, “Philosophisches Wörterbuch” Freiburg, 1959）にもリューンズの『哲学辞典』（D. D. Rume “Dictionary of Philosophy” Iowa, 1955）にも含まれていないということは興味ぶかいことである。それは「疎外」が哲学用語としては、まだなじみのうすい言葉だと解すべきであろうか。とんでもない。Entfremdung はドイツ古典哲学に用いられた概念なのである。英語の alienation（譲与・割譲）とドイツ語の Entfremdung（疎外）の意味を簡単に理解するには、例の有名なダヴィドフの寓話を想起すればいい。<sup>12)</sup>自分が蛇を呑みこんで自分の胃袋を蛇に譲渡した一人の男の話であるが、そののち蛇は逆に絶対君主のごとくその男に命令し、おびやかし、その男は呑みこんだ蛇の恣意に臣下の如く平伏する奴隷状態に変わってしまったという寓話なのであり、蛇に支配されている個人は救いようのない孤立感、偶然感におそわれる。ところで、「疎外」と自己疎外の意味内容も

ハッキリしておく必要がある。この点について務台の説明によると、「外からの人間疎外は、じつは中からの人間疎外をよび起こしている……人間があまり外から疎外されると疎外の意味すら考えることができなくなってしまう。貧しさはそのいちばんいい例で……つまり人間疎外は人間の暗い自己疎外の形となって現われる<sup>13)</sup>」と述べている。要するに「疎外」も「自己疎外」も同じことなのだが、もう少し詳しく述べてみよう。パッペンハイムは疎外には三つのタイプがあって、つまり「第一は人間の自己自身からの疎外である。近代の人間はしばしば自分自身であることに困難を感じている。われわれは自分自身にとってよそよそしい人間になってしまったと時折りいうことがある。それと同時に、われわれはまたわれわれの仲間である人間からもよそよそしくなり疎外されている。そして最後に、われわれの住んでいる世界から疎外されている」という3つのタイプがあるが「ほんとうは単一な疎外の過程の3つの異なった象面を示して」いるにすぎない<sup>14)</sup>と述べている。単に同一な過程の異なった面を表わすものにすぎないとすれば「疎外の二つの形態をそれぞれ別々に処理することはできない<sup>15)</sup>」わけである。これで「疎外」も「自己疎外」も単一な疎外過程であることが解ると思う。疎外の類型については、ブラウナーらは、Powerlessness, Meaninglessness, Social Alienation, Self-estrangement というような類型に分けて述べている<sup>16)</sup>し、社会心理学者のシーマンは『疎外の意味について』という論文で疎外概念の5つの用語法をあげて分類している。つまり、1) powerlessness 2) meaninglessness 3) normlessness 4) isolation 5) selfestrangement <sup>17)</sup>である。また、ルフェーヴルは「宗教的疎外・哲学的疎外・経済的疎外・政治的疎外・法律的疎外・倫理的疎外」等に分けて「疎外概念」を講述している<sup>18)</sup>が、これらの類型化の問題は次回にゆずる。小論では、「疎外」の意味をさらに的確にするために、一応「外化」から述べる。マルクスでさえ「疎外」と「外化」または「疎外」と「物化」を区別しないで使っているが、やはり区別して考えた方が理解

し易いように思う。

- 注 1) Kurt Schneider; *Klinische Psychopathologie*, Achte ergänzte Auflage, Georg Thieme Verlag, Stuttgart, 1967, S. 145.
- 2) Erich Fromm; *The Sane Society*, Holt, Rinehart and Winston, 1955, P. 121.
- 3) *ibid.*, P. 124.
- 4) Karl Jaspers; *Allgemeine Psychopathologie*; Achte Unveränderte Auflage, Springer-Verlag, Berlin-Heidelberg, New York, 1965, S. 79.
- 5) Schneider, S. 3.
- 6) Eugen Bleuler; *Lehrbuch der Psychiatrie*, Achte Auflage von Manfred Bleuler, Berlin-Göttingen-Heidelberg, Springer-Verlag, 1949, S. 15.
- 7) Jaspers, S. 53.
- 8) *ibid.*, S. 53.
- 9) *ibid.*, S. 79.
- 10) *ibid.*, S. 79.
- 11) 谷嶋喬四郎「疎外の論理と心理」(『実存主義』理想社刊所収 昭和42年10月号 4頁)
- 12) Juri Nikolajewitsch Dawydow; *Freiheit und Entfremdung*, (Taschenbuchreihe Unser Weltbild, Band 29 VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin 1964.)
- 藤野渉邦訳『自由と疎外』1967年 青木書店 11頁以下参照。
- 13) 務合理作『現代のヒューマニズム』1961年, 岩波新書, 134頁
- 14) F. パッペンハイム「疎外と社会」(I)(『思想』岩波書店刊所収 1964年 2月号 48頁)
- 15) F. パッペンハイム「疎外に対する闘争」——キューバ革命の展望から——『思想』岩波書店刊, 1961年 11月号 122頁)
- 16) Robert Blauner; *Alienation and Freedom*, —The Factory Worker and his Industry— The University of Chicago Press, 1964, P. 15 ff.
- 17) Melvin Seeman, On the Meaning of Alienation, in *American Sociological Review*, December 1959.

- 18) アンリ・ルフェーヴル「疎外の概急」(『思想』岩波書店刊所収  
1968年 4月号 111頁以下)

## 2. 外 化

精神病理学でいう「幻覚」「考想化声」(Gedankenlautwerden)を考えてみれば「疎外」＝「外化」の意味がいとも簡単に理解されよう。精神分裂病の幻覚のうちでおおいのは幻聴 (Gehörshalluzination) と体感幻覚 (abnorme Körpersensation) だが、この幻覚体験を患者にこまかく問いただしてみると、時には「自分の考えていることが声になってあらわれる」(考想化声)「書物を読んでいると頭の声にさきによまれてしまう」という訴えがある。「それは私の思っていることが聞えてくるんです。静かになるとその声は高くなります」(Das sind meine Gedanken, die ich höre. Die werden laut, wenn es still ist.<sup>1)</sup>) 自分の考えていること、すなわち自分の考えた考えが外から自分の頭に声になって聞えてくるのであるから、つまり「外化」であり、時にはその声が自分に対する指示、命令脅迫の形になることもあるわけで、この場合には「外化」＝「疎外」の意味をもつ。ところで、自我所属性 (自我保有性・ヤスパースのいう「能動性」の意識) の意味の把握はなかなかむづかしいが「自我の所属性 Meinhafteigkeit<sup>2)</sup> は他人から侵害された場合にだけその障害が把握可能になる」ものであり、その自我の所属性の障害が疎隔体験 (Entfremdungserlebnis) とよばれることは前に述べた。感情疎外 (Gefühlsentfremdung) とは、はたからみると、いきいきとした感情の表現がみられるのに、当人は自分の心の中では何もかも生気を失い、空虚になってしまったと訴えるような状態であるが、シュナイダーによれば「感情疎外のばあいには、感情たとえば子供に対する愛情——は明らかにもう存在していないのか、ほとんど存在していないのである。……この現象は単なる感情欠如の「感情」ともよばれるが、それは感情欠如に対する感情 (ein Gefühl für Gefühl-



losigkeit)<sup>3)</sup>である」と述べ「感情疎外は感情欠如に対する感情」にすぎぬとしているが、かかる自我性「または自我所属性」の障害においては、自分の心的作用や状態が自分のものとして体験されずに、他人から支配され影響されるものとして体験される。そして、それは「それが他人または外力のせい<sup>4)</sup>にされる」ものであって「心的感情が他からの<sup>5)</sup>作為として受けとられることがある」もので、シュナイダーは、ある詩人の詩を引用して説明している。すなわち「だれが私の魂に、かつて感じていたような生気をかえしてくれるやら<sup>6)</sup>」と述べたが、この疎外された感情は外化されて、「他からの作為」として感じられるのは当然であろう。つまり「疎外」は「外化」の意味をもつ、「かつて感じていたような」生気は「外化」されているがゆえに「かえしてくれる」べきものとなったのである。フロムが「疎外とは人間が自分じしんを例外者として経験する経験様式を意味する<sup>7)</sup>」と述べて「人間が自分じしんから遠ざかってしまったこと<sup>8)</sup>」と定義しているが、これはシュナイダーの『精神病理学』の感情疎外、つまり感情欠如の感情である。この外化の概念をもう少し拡大しながら、他の例を引用して考えてみよう。たとえばミルズが有名人（セレブリティス）とは、われわれが作りあげた単なる名前であり、それは「人物そのもの」ではなく単なる名前なのだが、「有名人（the celebrities）とは名前であり、それ以上なにも付け加える必要がない、しかもなんらかの程度の<sup>9)</sup>昂奮と畏敬をひきおこす」という場合を考えてみよう。われわれの作りあげたセレブリティスは、われわれから独立して勝手に独り歩きしている。われわれに「外化」してわれわれに対立している。ほかのものに例をとろう。「科学・技術」にせよ「官僚機構」にせよ、「マス・メディア」にせよ、みなわれわれが作りあげたものであり単なる手段であった。「なにになにのための或るもの」(etwas, um zu) であり、道具的存在 (Zuhandensein) だった。ところがわれわれに外化して、われわれに対立するものとなった。リルケの次の詩をみれば「外化」(疎外) の意味が首肯されるだろう。

見よ機械を

それが回転し復讐するさまを

われを歪め弱むるさまを

われらよりも 力を求めんとするならば

機械よ ひたすらに静かに

回転し はた仕えよ

これは機械の支配下に入った時代に人間性の優越を守ろうとした詩人リルケの詩である。ヤスパーズは科学・技術について次のように述べている。  
「技術は科学的人間による自然支配の営み<sup>10)</sup>」であるが「18世紀以降技術の革命がおこり、その速度は今日に至るまで高められてきた」ものであり「カール・マルクスが最初に大きなスケールで認識した<sup>11)</sup>」ものだが「自然支配が強力に推進されたがために、かえって近代技術は人間自身を以前に予想もされなかった仕方<sup>12)</sup>で今にも征服せんばかり」となり、「人間は自分で自分のものとして技術的に産出した第二の自然のなかで窒息<sup>13)</sup>する運命となったのであると説明している。そして結局は人間は「故郷をもたぬ地上の住人となり、人間は伝統のつながりを喪失<sup>14)</sup>」し、人間をして「有用な機能たる訓練」に「機械のなかの機能的分子」になり、非人格化して、無思慮にひたすらに生きるだけ<sup>15)</sup>のものとなる。そして、産業労働については、ヤスパーズは、ヘーゲルの「自己の活動と労働にみずから満足を見出すこと、これが主体の無限の権利である」の標語を引用して、疎外からの克服には労働が自分のものであること、その労働のなかに満足がなくてはならぬ、ということを示唆しているが、このヤスパーズの指示にもかかわらず、現代産業社会においては「人間そのものが目的に適合するように加工さるべき原料のひとつとなり、以前には、全体の内実であり意義であったところのもの——すなわち、人間が手段となる」のであり、この科学技

術からの疎外は「無思想、機構の中での空虚な機能、内面性を喪失した自働機械、娯楽への自己喪失、増大していく無自覚、過剰な神経抗奮<sup>16)</sup>」へと埋没するにいたる。

注 1) Schneider, S. 98.

2) *ibid.*, S. 125.

3) *ibid.*, S. 155.

4) *ibid.*, S. 122.

5) *ibid.*, S. 156.

6) *ibid.*, S. 156.

7) Fromm, P. 121.

8) *ibid.*, P. 121.

9) C. Wright Mills; *The Power Elite*, Oxford University Press, INC, 1956, P. 72.

10) Karl Jaspers; *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, R. Piper Co Verlag München, 1949, S. 129.

11) *ibid.*, S. 129.

12) *ibid.*, S. 129.

13) *ibid.*, S. 129.

14) *ibid.*, S. 129.

15) *ibid.*, S. 130.

16) *ibid.*, S. 152.

### 3. 物 化

精神病理学では、とくべつに「物化」という術語はない。フロムは「神経症の人間 (the neurotic person) とは疎外された人間である。……ちょうど、かれの仲間人間がかれにとって他人であるのと同じように、かれは、自分じしんにとっても他人なのだ。かれは他人をも、自分をも、本当にあるがままに経験するのではなくて、かれらのうちで働く無意識の力によってゆがめられたものとして経験する<sup>1)</sup>」とのべ、ノイローゼのひとは

「自分じしんにとっても他人なのだ」というが、ノイローゼは心因的なもので、自我がおびやかされている状態をいう。このばあい、自我にあたえる負担を軽減し Ich-Entlastung あるいは、病気によるエネルギーの消費をなるべく節約 Leidersparnis しようとしてあらわすのが神経症状である。神経症にみられる防衛機制とは、目的論に言えば自己の保全・逃避・願望充足などの意味をもつ。シュナイダーは「神経症は神経の障害でなく心的障害である」「神経症は＜もつ＞のでなくて、神経症者で＜ある＞のである。神経症者が治りたいと思うなら、この事情を理解することだ<sup>2)</sup>」といっているが、神経症は自己不信であるから「じじつひとは自分じしんを自分の力や豊かさの活動的な担い手として経験するのではなくて、その生き生きした本質を投射した、かれの外部の力に依存する貧しい＜物体＞だと自分を感じずる<sup>3)</sup>」のである。フロムは「疎外概念は旧約聖書の予言者たちが偶像崇拜とよぶものに等しく<sup>4)</sup>」この偶像崇拜という意味をよく考えてみれば疎外の意味がよく理解されるだろうと述べている。この意味であらゆる服従的崇拜の行為は疎外と偶像崇拜の行為なのであって、ひとが非合理的な情熱に支配されたとき、それが他人との関係だけでなく自分じしんとの関係におけるものであっても偶像崇拜または疎外といえるのである。だから『キリスト教の本質』のなかで、フォイエルバッハは「宗教の秘密は人間学である、(das Geheimnis der Theologie ist die Anthropologie<sup>5)</sup>)」と述べ、じっさい人間は自分自身の本質を自分の中に見出す前に、まず自分の外に移すのだといい、「神学の批判こそ人間の此岸的現世諸関係(diesseitigen, weltlichen Verhältnisse des Menschen)に対する一切の批判の前提<sup>6)</sup>」だとする。かくて「神学は思弁的な宗教哲学によってのように、オントロジーとして取りあつかわれるのではなくして、精神病理学として取り扱われるのだ<sup>7)</sup>」と断定する。つまりフォイエルバッハは宗教の人間疎外は「精神病理学の疎外」として取り扱われるべきだという。さて、偶像崇拜について考えてみよう。「偶像を崇拜する人間は、かれじしんの手によ

る作品に頭をさげている。つまり偶像は疎外された形で、かれじしんの生命力をあらわしている」<sup>8)</sup> わけで、自己の精力・能力を傾注して作りあげたキリストの偶像（人間的努力の結晶）に膝まづいているわけで、この疎外は、偶像という「物体」に疎外されているのであるから「物化」という意味がよく理解されるであろう。だから、フロムは「偶像崇拜という意味をまず考えてみると＜疎外＞がもっとよく理解できる」<sup>9)</sup>と述べているわけで、この「疎外」の内容はむろん「物化」の意味である。こういう例は、いくらでもあげることができようが、たとえば、1842年のマルクスの木材盗伐法（das Holzdiebstahlgesetz）に関する討論を考えてみよう。「木材所有者に属し、他人に盗まれることのある木材は、およそ単なる木材ではなく、経済的、社会的な、したがって一般的に、人間的な意義をもった物である」<sup>10)</sup>「人間がすでに単なる木材によって規定されうるというのは、単なる木材そのものが既に商品と同じく呪物的性格（Fetisch-Charakter）をもっているからである。だからこそ《木材の偶像が勝ち、人間がその犠牲となる》」<sup>11)</sup>のであって、物的な諸関係が人間を支配するような準人格的な力にまで人間化することによって、逆に「人間的関係そのものが物化」するのであり、「資本主義的経済の《経済的細胞》は、労働生産物の商品形態であり、商品は（討論における《木材》と同様）自己疎外の経済的表現」<sup>12)</sup>なのである。そして貨幣の存在が社会的関係の物化を前提しているからこそ「貨幣が一つの社会的性質をもちうるのは、個人がかれらじしんの社会的関係を対象として自分じしんから疎外しているからにほかならない」<sup>13)</sup>のであり、労働の社会的関係を対象として自分じしんから疎外したものである。現代産業社会においては、人間はいよいよ＜商品化＞され、人と人との関係は＜物と物＞との関係においてひき裂れるのであり、これらの関係はいつも「物に結びつけられ、物としてあらわれる」のである。次に「抽象化」と解さるべき「疎外」について述べよう。

- 注 1) Fromm, P. 121.  
 2) Schneider, S. 49.  
 3) Fromm, P. 121.  
 4) *ibid.*, P. 121.  
 5) Karl Löwith; *Von Hegel zu Nietzsche*, — Der revolutionäre Bruch im Denken der neunzehnten Jahrhunderts — Marx und Kierkegaard, fünfte Auflage, W. Kohlhammer Verlag, Stuttgart, 1964, S. 360.  
 6) Karl Löwith; *Gesammelte Abhandlungen* — Zur Kritik der geschichtlichen Existenz, W. Kohlhammer Verlag, 1960, S. 41.  
 または, Ludwig Feuerbach; *Vorläufige Thesen zur Reformation der Philosophie*, Philosophische Kritiken und Grundsätze, (1839~1846), Verlag Philipp Reclam jun. Leipzig, S. 169.  
 7) フォイエルバッハ『キリスト教の本質』船山信一邦訳 昭和12年 岩波文庫 18頁  
 8) Fromm, P. 122.  
 9) *ibid.*, P. 121.  
 10) Löwith, *Gesammelte Abhandlungen*, S. 45.  
 11) *ibid.*, S. 46.  
 12) *ibid.*, S. 48.  
 13) Marx, K. *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, S. 78.

#### 4. 抽 象 化

フロムによると「疎外されたひとは、とても健康とはいえない。こういうひとは、自分が、じしんや他人によってあやつられる物質であり、投資物だと感ずるので自己意識というものをもたない。このように自分がないことは、ふかい不安をひきおこす。虚無の深淵に直面させられたために生ずる不安は地獄の拷問よりもおそろしい<sup>1)</sup>」と述べ「現代がまさに不安の時代とよばれるのにふさわしいとしたら、それはまず自己喪失から生じたこの不安のためである<sup>2)</sup>」と説明している。どういう意味において現代は

「不安の時代」なのか。どういう点でわれわれは「自己喪失」させられているのであるか。フロムは「客観的な行為に関連づけて外界を知覚できないひとは狂気である。外界を写真のようにだけ経験できるが、内界つまり自分じしんと接触していないひとは疎外された人間である。精神分裂病と疎外とは補足的な関係にある。この二つの型の病気では、人間存在の一方の極がかけている<sup>3)</sup>」と述べたが「外界を写真のようにだけ経験」することは何をいみするのか？ 疎外された人間の思考の特質は彼らが自分の現実をただ当然のことと考えていることであり、現実の意味（現在かくあるのは何故か）を尋ねようとしないことである。言い換えると、現代産業社会におけるひとつの要因は「理性にとって破壊的なものであり<sup>4)</sup>」組織があまり大きくなると、誰しも全体を見透すことができず、現象の根底にある法則が理解しにくい。理性として、全体として把握できない。別な表現をすると「ある大きさの限度をこえると必然的に具体性がなくなって抽象化<sup>5)</sup>がおこる」のである。いくつかの例をあげて説明すると、現代産業社会は「原子によって構成される。つまりたがいに異なっているが、利己的な利益やたがいに利用しあう必要のために結合された微分子によって構成<sup>6)</sup>」されているが、その仲間<sup>7)</sup>に對もる現代人の関係はたがいに利用し合う二つの抽象の内容、二つの生命をもつ機械の関係である。雇傭者は雇う人間を利用しセールスマンはその顧客を利用する<sup>7)</sup>にいう関係に要約されるのであり、自分じしんに對する関係は、「本来の性質から疎外され、社会体制のなかで、なんらかの機能を果す抽象物としてみずから経験<sup>8)</sup>する」にすぎなくなっている。さらに「人間のパーソナリティが労働市場における商品」であって、たとえば「かれのからだ、頭、そして魂はその資本であり、人生におけるかれの仕事は、それを有利に投資して自分じしんから利益をうる<sup>9)</sup>ことである」つまり彼じしんが目的に對する手段であり、必要があれば「お定り文句の挨拶」をし、「感謝の言葉をならべ」「微笑を売る」ことをあえてするわけであって「取引の仮面」を装おう。かくして売物にだされ

た疎外されたパーソナリティは実体としての自分自身しんを失う。このように、仲間同志からも疎外され、自分自身からも疎外され、結局各個人は抽象的な存在すなわち「数字」として表現されるだけのものでしかない。「具体から抽象へ」というこの変化は、生産の分野における貸借対照表と経済事務の数量化を越えて発展<sup>10)</sup>し「人間は検査成績に表わされる数や量によって分類されこれを基としていろいろな集団類型、等級に整理<sup>11)</sup>」されてしまうのであって、つまり人間はその数や成績から判定され抽象化される。あるものは「大学生何名」「婦人何名」「有権者何者」という単なる数である。解り易い例をあげてみよう。「19世紀のはじめごろロシアに旅行したスタール夫人の記述によると、その吹奏楽では20人以上の楽士のひとりひとりが、それぞれドならド、レならレと、ひとつの音だけを出すようにきめられており、自分の音を出すべき順番がきたときにその音を出す。各人は自分にあてがわれた音によって呼ばれる。彼らの一隊が通るのをみると、ひとびとは、あそこにナリシユキン氏のソが通る、ミが通る、レが通るなどというのである。これはロシアの大地主と農奴とのあいだの典型的な関係であって、そこでは音楽はもはや各人のものではない<sup>12)</sup>」とケルケゴールは述べたが、いつでもソならソの音ばかり出している農奴と同じように現代のひとびとは、個性を奪われて単なる部品となり単なる員数であるにすぎない。人間性は抽象されて「人間はただ有用な機能たる訓練<sup>13)</sup>」となり、「個人は機械のなかの機能的分子となり、非人格化して無思慮にひたすら生きることだけに没頭し、過去と未来への展望を喪失して、狭い現在へと萎縮し、自己に対し非誠実で、要求されるいかなる目的に対しても没個性的に役立ちうるもの<sup>14)</sup>」となってしまう。「自分がじしんや他人によって、あやつられる物質」であり、「自己意識をもたないのであって、ひとりひとりの人間を指示するためには、たんにアルファベットと数字がありさえすればいいということになる。かくして人間の平均化、機械化、集団化はいよいよ不可避になり、人間の代替性とメカニズムの隷従がいよいよ深刻化



する。「虚無の深淵に直面させられたために生ずる不安」は当然の結果として、現下の大学問題にみるような騒乱を結果する。「学生人口の爆発的増加の結果、自分が名もない集団の一員になっているからだ<sup>15)</sup>」とロゲンドルフは説明しているが、それはまさに「現代高度産業社会における人間疎外への反抗」にほかならないのであり、「世界の悩みの即時的表現<sup>16)</sup>」というドラッカーの解釈をまつまでもなく、マスと化した、抽象化された学生集団の反抗の叫びというべきであろう。もう一つ抽象化の例をあげて説明しよう。たとえば「金銭は労働や努力を抽象的な形<sup>17)</sup>」で現わしているが、金銭は他のいかなるものとも交換できるものであり、現代ではすべての労働は金銭で酬われるし、経済関係の密接な組織は労働の抽象的表現たる金銭に還元できる。そうすると、すべてのものが抽象化されて、人や物の具体的現実<sup>18)</sup>は抽象によって幻影によって語られる。フロムのいうように、「300万ドルの機」とか「20セント葉巻」とか「5ドル時計」というように、橋や葉巻や時計の具体性に関心をもつのでなく、その主要な性質は金銭の額で抽象化された形で述べられる。じじつ、それは現代人の社会的性格に固有な抽象化であり、疎外の病状なのである。「科学も商業も政治も人間らしいセンスをもつ基礎や調和をまったく失って」われわれは数字や抽象化のなかに生きている。人間は自分で作り上げた力に追い立てられながら、狂気のなかで計画し、抽象することに追われつつ、ますます具体的な生活から遠ざかってゆく。

注 1) Fromm, P. 204.

2) ibid., P. 204.

3) ibid., P. 207.

4) ibid., P. 171.

5) ibid., P. 171.

6) ibid., P. 139.

7) ibid., P. 139.

- 8) *ibid.*, P. 142.
- 9) *ibid.*, P. 142.
- 10) *ibid.*, P. 111.
- 11) K. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, S. 145.
- 12) 松浪信三郎『実存主義』岩波新書, 1962年, 46頁
- 13) Jaspers, S. 129.
- 14) *ibid.*, S. 130.
- 15) ヨゼフ・ロゲンドルフ「どこが違う, 東西の騒乱学生」(『自由』自由社刊所収 昭和44年7月号 89頁)
- 16) P. F. ドラツカー. 林雄二郎邦訳『断絶の時代』ダイヤモンド社 昭和44年 321頁
- 17) Fromm, P. 131.
- 18) *ibid.*, P. 114.

## 5. 疎外の肯定的意味と否定的意味

以上述べてきた「疎外」の意味は、「疎外」の否定的な側面（いわばマイナスの意味）ばかりを強調しているようだが、「疎外」の肯定的な側面（いわばプラスの意味）もあることを忘れてはなるまい。さきに述べたシーマンの『疎外の意味について』では、疎外概念は、1) 無力さ (powerlessness) 2) 無意味さ (meaninglessness) 3) 無規準性 (normlessness) 4) 孤立 (isolation) 5) 自己疎隔 (selfestrangement) に分類説明されているが、こういうばあい、やはり疎外のマイナスの面のみが強調されて感じられ易いが、「疎外」は人間社会に対する幻滅や不順応などということだけでなく、「人間とかれが作りだした社会的 文化的 所産との関係」が問題となるべきものである。自己の労働に「無意味さ」の感覚をもつものは勿論「疎外」された人びとであるのには遺いないが、社会について、ないしは人生についても一枚岩的教条主義をもつひとも同じく「疎外」された人びとなのである。またわれわれからみて、どんなに「疎外」された人びとにみえようとも、その人じしん最大の生きがいを感じているという

場合もあるのであろう。だから、すべての疎外現象が「現体制」の生みだす疎外にかかわりをもっているにしても、すべての疎外現象を特定の客観的状况に、その原因を帰着させる「基底還元主義」のひとつとは「疎外」の問題をむしろ単純化してしまう危険をもつものである。「疎外」の肯定的意味も、やはり考えてみる必要がある。コルニユは「プロレタリアの疎外の両局面は相補う。すなわち、労働の生産物の対象化された外化であるように、労働そのもの、生産はプロレタリアの外化の活動である<sup>1)</sup>」といい、「マルクスは疎外を一つの歴史的に条件づけられた現象とみる……そのさいフォイエルバッハとは反対に、外化をたんに疎外——そのようなものとして揚棄されねばならぬような——としてではなく、主として人間の本質的な、もろもろの力の対象化として把握し、それゆえに外化に肯定的積極的な価値を付与する<sup>2)</sup>」と述べたが、要するに「生産はプロレタリアの外化活動」であり「外化に肯定的積極的な価値」があるべきであるから、「疎外」の肯定的積極的な価値をみ落してはならないのである。「疎外」の否定面のみを強調することは、クレラがのちに述べるように、疎外論に対する曲解である。すなわちクレラによると、「人間の本質」を直観的にとらえたいと思うひとは、人類が動物界から解き離されはじめいろいろの生産的創造のとてつもない大きいパノラマを自分の眼のまえて回転させてみさえすればよい<sup>3)</sup>という。疎外は人間とともに始まり、人間とともに終るのであり、人間の歴史は「疎外」克服の歴史でもある。いま、画家がカンバスの上にかれの作品を画く場合を想像してみよう。彼はでたらめに絵具を塗るのではない。まず、自己の意識のなかで対象化されたイメージ、つまりかれ自身の意識のなかで、むかいあっている自分自身を画面に対象化していくわけだが、ここではじめて生産的、創造的作品が生まれる。「画家が一枝の絵をかくとき、その絵の中には画家の主体が外化されている。画家はそこで外に出された自分自身とむかいあう。わたくしたちが自分で考えていることを文章にするときも同様で、わたくしたちの主観の中にだけあったも

のは、客観的な文章として定着し、わたくししかし独立、しわたくしとむかいあう。そして、この外化＝疎外によって、わたくしたちの主観の中にあるものは、明瞭な形をとるのである。このようにして、外に出た自分を対象とすることによって、人間は自分自身の本質を対象的に把握し確認＝自覚するのである。人間は自分を確認するためには、まず自分を外化させ、それとむかいあわねばならない<sup>4)</sup>」というように、疎外＝外化、確認＝自覚のプロセスを経て、創造的・生産的活動となるわけで、「疎外」の積極的な肯定的な側面がおのずから理解されうるであろう。

もともと「疎外」というのは「狂ったひと」を意味する古い言葉で、精神病理学の単なる術語であるから、肯定面も否定面もあるべきものののだが、これが「人間の自己疎外」というように、歴史的・社会的・具体的な内容を挿入して考えられることによって、マイナスの側面ばかりを強調する結果となるのであろう。パッペンハイムは「だから、疎外には肯定的な面もあること、少なくとも、そのある段階においては、そうであるということをおきたい。疎外には、ある種の無私な客観的態度が含まれている。そして、この態度は近代の科学的思考の発達にとって、重大な——不可欠とさえいえる——ものだったのである<sup>5)</sup>」と述べ「この点について、ヘーゲルおよび彼の著作は特徴的」だという。「疎外」には無私の客観的態度が含まれている。そしてその態度は近代の科学的思考の発達にとって、重要不可欠の要素であったのである。そして疎外は「正しくは、二面の弁証法的統一<sup>6)</sup>」なのであり、その一面のみが強調されて、他の一面が忘れ去られている傾向がないでもない。マルクスは1844年の『経済学・哲学草稿』で疎外された労働とそれが人間の自由に及ぼす脅威を力説したにもかかわらず、けっして疎外の否定的な破壊的な面だけを注目したわけではない。マルクスはヘーゲルと同じく、人類は疎外の苦悩とそれを克服するための闘争を通過することによって、自己自身のところへ帰るのだという確信を抱いていた。マルクスによると、このことが労働過程に真の意味を与える

わけであって、「主体的・自然としての人間は労働（生産的実践）を通して生活を維持し——文化を創造する」つまり「疎外」は否定面のみを意味してはいない。また、動物は、つねに、現にそうであるところのものであり、それゆえに自己を疎外することはできない。それに反して、人間は意識と自己意識をもつ。自己の存在を仲間たちに対して、伝達することによって、たしかめ、このようにして自己の同一性を発見するから、自己を疎外することができるのであって、「自己疎外」は人間の特権なのだ。すなわち「人間は自己を対象化することの唯一の動物」であり、自己対象化は人間の本質であるから自己疎外は人間の本質的契機なのである。パッペンハイムは「疎外は必ずしも当人によって意識されているとはかぎらないが、疎外された人間は成功している人間である場合が多い<sup>7)</sup>」と述べている。「疎外」の否定面のみを強調することは「疎外」にたいする曲解である。

注 1) Auguste Corun; *Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werk*, Bb, II. Berlin, 1961, S.174.

2) *ibid.*, S.203.

3) Alfred Kurella, *Der Mensch als Schöpfer seiner selbst. Beiträge zum sozialistischen Humanismus.* Berlin 1958.

『疎外とヒューマニズム』藤野渉邦訳、青木書店 昭和42年 139頁

4) 梅本克己『人間論』三一書房、1962年、149頁以下

5) パッペンハイム「疎外と社会」(『思想』岩波書店刊所収、1964年2月号 50頁)

6) 出口勇蔵『社会思想史』経済学全集2 筑摩書房 1967年、219頁

7) パッペンハイム、前掲論文、59頁

## 結 び

筆書は小論において、まず「疎外」の一般的意味を述べ、ことに「疎外」が語源的に狂気という意味をもつことから、精神病理学的に注釈を加えな

がら、その「出所と正体」を把ようとささやかな努力をこころみてみた。  
また「疎外」が「外化」「物化」「抽象化」という意味に転用されて広く解釈されているので第2節以下、通俗化されつつも、より難解な社会科学的術語に転用されている、これらの意味を解明しようとしてこころみた。疎外の類型については次回にゆずる。小論のなかでフロムが「現代人の仲間に対する関係は、たがいに利用しあう二つの抽象の内容・二つの生命をもつ機械の関係だ」といったが、これを「現代の教師と学生の関係は、たがいに利用しあう二つの抽象の内容・二つの生命をもつ機械の関係」と言いかえるなら、現下の大学問題は「疎外された社会のなかにおける疎外」の関係である。もっとわれわれは、現実を凝視し、「疎外」の真意を今こそよく考えるべきときではないか。